

# OGインタビュー

## 世界各地で演奏活動する

### ヴァイオリニスト 中澤きみ子さん

#### ▶ 学生時代の思い出について

私が学生の頃は、全共闘の事件が盛んでとても衝撃を受けました。そのような中であっても、大学で出会った友達と一緒に勉強したり、お寿司を作って食べたりしたことがとても印象に残っています。私は教育学部に所属していたため、いろんな分野の勉強を満遍なくしていました。一番つらかったのが水泳の試験でした。当時は教員志望で、水泳の試験を通らないと教員の免許が取れなかったため、本当に必死に取り組んだことを覚えています。その時は音楽のことは忘れ、水泳に没頭していました。新潟大学は総合大学であり、専門の勉強に偏らず、バランスの取れた勉強をすることができたことは、今の私の生き方に大きな広がりを見せています。

#### ▶ バイオリニストの道を進もうと決心した一番のきっかけは。

私がバイオリンを始めたのは五歳からでしたが、当時は教員を目指していたためバイオリニストの道は頭の中にはなく、また、自分にはそれだけの力もあると思っていませんでした。そのような中で、一番の転機となったのが、卒業ぎりぎりまで進路を決めようとしている時に、私の主任の教授が言ってくださった一言でした。「中澤君は学校の先生じゃないと思うよ。バイオリンで行くべきじゃないかな」と言われ、学校の先生ではなく、バイオリンでやっていきたいと思うようになりました。

#### ▶ その後は順調に行ったのですか。

バイオリンを弾いたからといってすぐにお金をもらえるわけでもなく、最初は五十人くらいの生徒を教えることから出発しました。それから四、五年が過ぎて二十七歳になった時、早く結婚もしなければとも思っていたのですが、私のバイオリンの力も試してみたいと思い、オーストリアのザルツブルクとウィーンに旅立ちました。そこでは本当に驚くような展開がありました。

#### ▶ どのような展開があったのですか。

ザルツブルクの講習を受けに行ったのですが、なんと私が音楽院のコンクールで一番になってしまいました。聴衆が「ブラボー、ブラボー」と言ってくださり、本当に驚きました。コンサートに参加するのはほとんど音大出身の人ばかりで、新潟大出身ということでコンプレックスを持っていましたが、音楽に対して本物の国の人が感動してくれたことで自信が出て、バイオリンでいけると確信を持つことができました。日本の中ではすぐく学閥がありますが、ヨーロッパの人はクラシックがベースにあり、日本の大学のことを知らない人がほとんどです。何の先入観もないところで私の演奏を聴いてくれて、その中で一番になれたことはとても嬉しかったです。私の場合は、それから日本でのツアーやヨーロッパのオーケストラとの共演が始まりました。もうその時は、年齢はすでに四十歳を越えていました。しかし私は、若いときの苦労や様々な経験は無駄だとは思っていません。四十歳になるまでに結婚もし、子育てなども経験しましたが、それが今の私の音楽に活かされていると思います。

#### ▶ いろんな経験をする中で、それが音にも伝わっていきますか。

作曲家は自分の人生を乗せて演奏しているので、その人の人生を理解しないで気持ちをつかんだ演奏をすることはできません。年齢を重ねた演奏家ほど、一つの音に対して多くのことを伝える能力があると思います。残念なことに日本では、若い人が中心で、すぐに使い捨てにしてしまう文化があります。若い人は綺麗で、技術も素晴らしいのですが、十代だったら十代、二十代だったら二十代の経験しか音には伝わりません。逆にヨーロッパでは歴史や伝統を大切にしているため、音楽家も大切にされ、私のような年代の人でも楽器を弾いている人はたくさんいます。特にベートーベン、モーツァルト、シューベルトが演奏する曲には、死に直面して作っているものが多くあります。だから、ものすごく深く、死への恐怖が音楽に現れています。自分の死は経験してはいなくても、私の場合は父の死を経験しているため、それを音楽に伝えていくことができます。また、人を愛する喜びや苦しみ、子どもが生まれた時の喜びも、実際に経験していないとそれを伝えることはできません。このような内容を一通り経験できるのは私くらいの年齢にならないとできないので、私は使命感を持ってバイオリンを弾いていきたいと思っています。

#### ▶ バイオリニストとしてデビューするまでに時間がかかりましたが、困難な環境を越えることができた一番の秘訣は何ですか。

日本で偏った教育を受けず、真っ白な状態でヨーロッパの文化に触れることができたからだと思います。学閥に関係なく、私に力を与えてくれたのが外国人のアーティストで、本物の環境に勇気を持って飛び込み、コンサートなど恵まれた環境が与えられたからだと思います。後は、私の根底に「音楽が好き」という思いが強かったからだと思います。だからこそ、苦労があってもあきらめずに続けることができたと思います。

#### ▶ これからの夢や目標は何かありますか。

最近でははじめの問題がすごく、とても胸を痛めることが多くあります。私がバイオリンを弾けるうちは、多くの人の心の糧、心の栄養剤になれるように頑張りたいと思います。特に若い人には、人気のないクラシックがどれだけ人間の心を癒してきたのかに気づいてもらいたいです。また私のコンサートに来た人は、同じ人間としてお互いに愛し、手をつないで帰るような、そんなコンサートにできたらいいなと思います。

#### ▶ 最後に、学生に対してのメッセージをお願いします。

何事も、ネバートウーレイト（遅すぎることはない）だと思います。大学の中だけに限らず、人生の中でやりたいことが見つかったら、それは大きな幸せだと思います。一つでもいいので、これだけはやりたいというものを掴んでもらいたいです。

バイオリニストとして、日本に限らずヨーロッパを中心に世界各地で演奏活動をしている、本学教育学部OGの中澤きみ子さん。  
**「音楽は人生そのもの」**を信条に演奏する中澤さんのコンサートには、人を感動させる大きな力がある。そんな中澤さんに、バイオリニストとして道を決心したきっかけ、これからの夢や目標などを語ってもらった。

